地域に根づく医療を求めて

――スペシャリストと草の根の連帯――

□特別対談

若月俊一×沼田稲次郎

I 医学の建設へ

●共通の関心事である草の根運動

沼田　名にし負う佐久総合病院を御案内いただいて、ずいぶん勉強になりました。どうもありがとうございました。吉田秀夫さんが生前しきりに私に佐久病院の話をしてくれてましてね。私が病気で倒れるようなときには、自分が若月先生とは親しいからすぐに紹介するといってくれてましたが、日本一の名医のいる日本一の病院だという文脈で、わがことのように自慢されていたものです。その吉田さんの霊前で私が弔辞を読むことになろうとは、そして私がいま日本一の病院をみせていただき、これから日本一の名医と一夕の対談ができるとは……いささか感慨を覚えるところですが、それは私情のことです。

もとより一夕の時間をとっていただきたいと思っていたのは、吉田さんの影響もさることながら、私自身が先生の書かれたものを読んだり、社会的にも知れわたった先生の実践からみて、その生きざまというか問題意識と人生の選択というか、それに魅力と敬意とを感じていたからです。わけても私自身数年来、日本社会の民主的形成にとって、住民運動・市民運動などいわゆる〝草の根運動の構築〟の仕方の重要性が痛感されてきていました。大学をやめてから現実に草の根運動に関わるようになって、いろんなことに気がついてきました。政府・財界が着々と先手をとって来ているのに、これと四つに組んでゆける革新の運動が形成されていません。そのためには、何が誰に

わかつき・としかず　一九一〇年生まれ。現在、長野県厚生連佐久総合病院院長、日本農村医学会理事長、国際農村医学会名誉会長兼事務総長

よってどのようになされねばならないものか、が反省されねばなるまいと思っているのです。それは恐らく今日、心ある人びとの等しく憂い等しく模索している問題でしょうが、若月先生の理論と実践とは、このような問題について示唆に富むにちがいないと思うのですよ。

佐久病院をこれだけの総合病院にしたのは一人でおやりになったわけでもないでしょうけど、でも、若月さんを抜きにしてはあり得なかっただろうと思う。佐久病院をきょう見せてもらってまたびっくりしたわけですが、一度お話を承わってみたいという気持ちに誘われまして……。

ぬまた・いねじろう　一九一四年生まれ、元都立大学総長、現在、都立大学名誉教授、日本国際民主法律家協会会長

政府の総医療費抑制策や政治反動が進むなかで，健康といのちと生活を守るために地域での連帯づくりが求められている。在野に生涯をかける両氏によって，今草の根の民主主義にかける熱い想いが緊張に満ちて展開される。

目次

I　医学の建設へ
共通の関心事〝草の根〟運動
軍隊の時代に
師弟の関係と人間性
公害研究と学者の精神
三木清の獄死について
我もし民衆の友たらんとせば
II　民衆のなかへ
民衆とともに生きること
民衆とは　と問われて
民衆の人間像について
民衆の中のデモクラシー精神
土地の人とは離れられない
III　草の根のこころ
草の根にたいする愛情
変わる生活とニード
トゥゲザーとスペシャリスト
体制と在野の対抗状況
民衆のエネルギー汲むシステム
地域の中に日本をみる、世界をみる
ひとが育ち合うこと

若月　先生のようなお方から、そんなお賞めの言葉を頂いて、まったく面喰らっています。日本一なんて、とんでもない。吉田秀夫先生は私と仲が好かったのできっと私を愛するあまり、買い被り過ぎていたのじゃないでしょうか。先生がきょうこの病院をご覧下さって、ほんとうに光栄なんですが、……しかし、確かに外観は若干立派かも

しれませんが、その内容はどうなのか。本当に地域住民のために尽しているのかどうか。まだ私自身にも自信はないのです。問題はこれからなのだと、従業員にもよくいっているのです。

毎日の外来患者が一四〇〇人。入院患者が九〇〇人というと、いかにも素晴らしいように聞こえますが、まだこれからの経過をよく見ないと、何ともいえないのじゃないかと真剣に考えているんです。これから、烈しい政府の医療費抑制政策が迫ってきていますし、やっぱり、あれはインチキだったなんていわれる日がくるんじゃないかと、日夜心配しているというのが、本音なんです。歴史はきびしいですからね。それに耐えられなければ本物じゃない。

でも今日は、先生のお話によく耳を傾け、また、先生のどんなご質問にも、できるだけ真面目にお答えするつもりでこの席に出たわけです。どうぞお手柔らかに……。

◎軍隊の時代に

沼田　実は先生からいただいた『来し方の記』を読んでおりまして、大学時代は少なくとも現象的には私といくらか似たコースだなあと思いました。というのは、先生も無期停学をくらっていられますね。私も京大時代に無期停学処分をうけたことがあるんですね……。また、ぼくは兵隊に取られるというのが宿命的だったわけですが、先生も甲種合格なんですね。結核やっていなすって……。

若月　ええ、そうなんです。はじめは麻布三連隊に初年兵として入りました。のちになって肺結核ということで、東京第一陸軍病院に入院です。あの頃はまったくひどかったですね。

沼田　ぼくは野戦に行っているのです。先生も満州はチチハルまで行ってられる。ただ先生は私よりも早く帰られていますね。ぼくは敗戦の直前まで足かけ七、八年になるんでしょうか。

若月　ぼくは昭和一二年一月から約三年間だけですからね。

沼田　先生は昭和一四年か一五年にはもう大学へ戻って、論文を書かれたり勉強しておられますね。

若月　ええ、まあそういうことになるんでしょうか。

沼田　非常に苦労されておりながら、その間に充分学問的に蓄積されておる感じですね。

若月　そうでしょうか。

沼田　ぼくも、軍隊にいたころにも比較的よく本を読んだほうですが、やっぱりブランクなんだなあという感じがしました。

若月　いや、先生がそんなことはないでしょう。じつはこの『農村医学』という本を川上武先生の要請で作ったんですが、川上さんはどうしてもこの最後に「某工場に於ける災害の統計的並に臨床的研究」の論文をのっけろというんです。これは、今、先生のお話にあった昭和一五年に私が軍隊から大学に帰ってからまとめたものなんです。

沼田　学位論文ですか。

若月　いえ……。実をいうと、これで学位をくれるという教授もいたんですけどね。

なにしろ調査対象が小松製作所ですので、「『農村医学』に収録するのはおかしいじゃないか」っていったら、「いや、これを今の若い先生にどうしても読ませたい」っていうものですから収録したわけですが、あとで『日本科学大系』にも入りました。そして、この論文がまた、あとで私が警視庁に捕まる理由にもなるんです（笑）。

沼田　なんとかケチをつけようと思えば、なんとでもなったんですよ（笑）。しかし、特高警察がなんていおうが研究の蓄積ですよね。

ずいぶん勉強をなさった。お医者さんだから臨床が即ち勉強になったり、それもありますでしょう。

若月　それはありますね。

沼田　戦時中にもずいぶん蓄積なさっているなと思いますね。

若月　自分じゃ足りないと思っていますがね……。

◎師弟の関係と人間性

沼田　ときに、大槻先生という方はなかなかよく人を見とった人のようですね。

若月　ええ、朝日新聞に「ほんとうの教育者は」と問われて――大槻菊男」など書いておきましたが、大槻菊男先生は私の本当の恩師です。

沼田　そういう感じですね。

若月　戒能さんが、こういうことを書いておられるんですよ。ここにも二度ばかり来られましてね。

沼田　戒能通孝さん？　ほう、ご存知でしたか。

若月　戒能さんは、私の『社会医学への道――十一人の証言』のなかで大槻先生のことを書いたら、それを読んで、非常に感動したっていうんです。そして当時の東大の医学部は師弟の関係がよかったじゃないか、わが法学部はそうじゃなかったぞっていうことらしいんですよ（笑い）。

沼田　いや、そうでしょうね。おそらく戒能さんは冷遇された感があるわけでしょう。なにしろあの人も向う意気が強いですからね。しかし、ぼくはいま、戒能さんが感銘を受けたという話を聞いたときに、大槻先生を戒能さんは、自分自身に当てがったかな、と思った。

若月　なるほど。そうですか。

沼田　というのは、戒能さんとは都立大学では同僚でもあって、よく知っていますが、あの人は非常に厳しい人だといわれておるんだが、冷たい人ではない。岩手の農民たちの入会権をめぐって争われた小繋事件というのがあったでしょう。小繋に住みついてがんばっておった藤本君に戒能さんはすっかり参っておる。「あれは私の恋人です」とかね。

若月　なるほど。

沼田　非常にシャープな人間が好きな面があるんですよ。あんまり鈍なのとか、ことに自己本位にしかものが考えられない人間は、あの人は大嫌いなんです。それは厳しい。いわば、人権意識が非常に高い。私は市民であるというだけのことはある。ちょっと怒りっぽいけれどね。

若月　（笑い）なるほど。

沼田　そこが市民の真面目でもありましょうかね。ところが藤本君みたいに、本当に小繋に定着して、肥料のなかに手をつっこんで田圃で働きながらオルグをした人間に感激しちゃった。自分には絶対にできっこない仕事だが、かえって敬意をはらったのですね。大槻先生は貴方に対して、ずっと厳しくやってきながらどこかで温く考えておったという点に我が意を得たりと感銘したのかと思ったのはそういうわけです。藤本君とまた別の意味で、先生は農村に定着された。とくに先生の場合は出世主義でいけばエリートコースを通れないわけじゃないのに農村医療のほうに意義を認めて飛びこんでいかれた。この意気込みは同じですよね。大槻さんも貴方の生きざまに動かされておるのじゃないかという気もするけど……。

若月　面白いものですね。……大槻先生がいちばん大事にして毎日使っていた「字引」をぼくにくれましてね。その「字引」は今、私の机の上にありますが、先生の手垢がいっぱいくっついています。先生はなんといってもクリスチャン的なまじめな人でしたし、お父さんは宮城県の貧しい農村地帯の開業医者でした。当時の非常に厳しい東北の農村から生まれてきた人といってもいいでしょう。兄弟が五人いまして、みんな博士になりました。そのうち農業の大槻正男博士がとくに有名で、「東の東畑精一、西の大槻正男」と言われるほどです。厳格な家庭で育った方ですが、それだけに正義感も強く、私なんかの新しい思想に一種の魅力を感じられたのかも知れませんね。

沼田　思想だけじゃなくて農村に本当に入りこんで戦後もずっとですからね、そういうところに先生も感じられたんじゃないですか。戒能さんが「医者にはいい先生がおって法律にはおらんな」といった気持ちが、私にはいろいろ曲折してわからんでもない。

若月　そうですか。……当時の東大の医学部にくらべて、法学部には人間的なものがなかったといわんばかり……。

沼田　それもわかるんですよね。だけど師弟関係ということでいうと、戒能さんを認めて、じっと見ながら別に手も加えなかったのが末弘厳太郎先生だったと思います。戦時中戒能さんは冷飯を食っとったでしょう。人間っていうのは冷飯食うたほうがいいもんでしてね。今みたいにぬくぬくと温室に育ったままでいくとね、駄目になる。嵐が吹くと怖くなるんですよ。

若月　それはそうかも知れませんね。

沼田　戒能さんはブタ箱へは行っておられないだろうが、どこも就職がなくなって、岩波の『法律学辞典』の手伝いかなんかやっておられたことがあると聞いたことがあります。

若月　そうですか。

沼田　末弘先生は積極的に面倒をみるというタイプの先生でもなかったようですね。しかし戒能さんを中支の慣行調査につれていったり、評価しながら見守っていらしたと私は思います。『法律時報』は、今でも末弘先生の名前になっていますが、末弘さんも没後はほとんど戒能さんが末弘先生の役割を引き受けてやったんですね。末弘・戒能の間には以心伝心に流れるものがあったのでは

ないでしょうかね。あの人は孤独な人でもあり、どっちかというと冷たい、しんどいと思う人が多いけど、そうじゃないですね。

若月　そうですか。ここへは奥さんと一緒に二度ばかりいらっしゃってます。

沼田　そうですか。奥さんには甘えてなさったね。多少毒舌を言うたり、逆説を言うたりする人ですが。

若月　そうらしいですね。

沼田　確かに戒能さんが感銘を受け、法学部と違って医学部というのはなかなかだなと言ったのは、多少の毒舌も含んでるんじゃないですかね。

若月　そうかも知れませんね。

◎公害研究と学者の精神

沼田　戒能さん的性格がそのなかにあったり、戒能さんのお弟子がちょうどあなたと同じように農村にぴったり入ってね、簡単に言えば「花のお江戸で踊らない」という、これが一種の魅力だったんと違いますか。

若月　戒能さんは公害研究所の所長をされてましたね。

沼田　あれは適材適所でした。

若月　実は、私は農民の健康のために農村医学をやっているうちに、高度成長時代になって農民がうんと農薬を使うようになりました。ホリドールとか、BHCとか、セレサン石灰のような恐ろしいものをたくさん撒く。それで私は否でも応でも農薬中毒の勉強をしないわけにはいかなくなったんです。私は中毒学についてはよく知らなかったのですが、勉強してみると、日本では中毒学の研究が非常に少ない。考えてみれば、中毒学をやれば必ず公害問題にひっかかります。それは政府や製薬産業とぶつかることになり、批判することにならざるをえない。ですから、医学部でお利口な教授の先生方はそういうことになるべく触れない方がいいと……。

沼田　なるほど。

若月　それでわが国では、中毒学が非常に遅れた。今でもそうですけどね。これは私のひがみ根性かもしれませんがね。そういう意味で私なんかが素人なのに、向うみずに農薬問題をとりあげ、研究や調査をやり出したのです。農家の健康のためにやる医学ですから、農民の身体に及ぼす急性中毒から勉強を始めました。そうしますと驚くなかれ、その害は急性中毒だけではなく、慢性中毒もある。さらに、残留して土も、水もそして農作物にまで大きな害を及ぼすということがわかり、結局これは、公害問題だっていうことがわかったわけです。その場合、農民は加害者にもなるわけです。撒いた農薬のために環境が汚染され、トンボやセミが居なくなった。農作物までが目に見えず危険になっている。

結局私の研究は、急性中毒から慢性中毒、また、農民自身の作業災害から、環境や食品の公害問題にまでいかざるを得なくなったのです。有機水銀を田圃に多量にばらまいていたり、有機塩素のDDTとかBHCなどもたくさん使っておりました。今、アメリカで問題になっておりますダイオキシンのような恐ろしい毒物を含む245Tのような除草剤までが私どもの研究の対象にならざるをえなくなりました。現にそういう問題が農村のなかに起きているのですから放っておくわけにはいきません。公害問題のなかに私が頭を入れるようになって、そこで、戒能先生との連携が出てきたんです。

沼田　そうですか。ぼくは美濃部さんの人事のなかでいちばんいい人事は戒能さんを公害研究所の所長にしたことだと思います。彼は公害をやり始めたら公害の本を急速に勉強して、独自の問題意識で取り組むという学者でした。戒能さんでも先生でもそうですが、問題意識を掃っている学者はどんなものからでも問題を引き出していきますよね。公害研所長になったら勉強して、うるさくてしょうがないくらい公害のことを強調する。みずから学会などで公害の報告をやる。あんなのいつの間に覚えたか知らんけど、薬の名前いっぱい並べるようになってね。そうして『東京都の公害』という本を出しました。

若月　あれはいい本でした。

沼田　東京都の仕事としてはすばらしいですね。公害研究所を確立して間もなく、戒能さんは亡くなられた。あの人の葬儀委員長をぼくがやりましたが、縁というものですね。

若月　そうですか、先生がやられたんですか。

沼田　そのとき、「疾風の如く人生を駆けた人だった」と委員長挨拶のときにいいましたが、私の率直な印象です。

若月　そうでしたか。

◎三木清の獄死について

沼田　たしか戒能さんは毎夏、別所温泉にこもって仕事したのですよ。

若月　実は先生、別所温泉といいますと、日本共産党の衆議院議員で作家の高倉テルさんがあそこにいましてね。私は終戦前後、テルさんにだいぶご指導を受けました。

沼田　佐久病院の組合結成のとき、テルさんが演説されたんですね。高倉テル先生は、もちろんぼくは無縁ですが、岩波に〝腐儒会〟っていう碁会がありました。そこで一度か二度、高倉先生をおみかけしました。

若月　そんなに高倉先生、碁がうまかったんですか。

沼田　うまかったようです。うまいといっても学者の碁でしょうがね(笑い)。それはね、三〇年くらい前です。

若月　高倉先生の碁といえば、三木先生を思い出しません？

沼田　三木清？　いや、ぼくは……。

若月　そうですか。三木清先生は高倉先生と碁友だちだった。それが三木先生の獄死と関係があったというのです。昭和二〇年一月頃じゃなかったでしょうか。まず、高倉先生が警視庁に捕まる。そして、三木さんも捕まることになるんです。三木さんはその八月に死んでますから、ちょうど半年ぐらい入っていた。

沼田　三木さんが疥癬で死んだというのは…。

若月　そういう話を聞きましたが、本当と思いますよ。戸坂潤もそうじゃないでしょうか。当時は入獄して半年目で死んだものです。不潔と栄養不足と、そこへ疥癬になりますと危険なのです。全身に湿疹ができますと、それが化膿して腎臓がやられる。急性腎炎から慢性腎炎になると、身体の状態が極端に悪いから尿毒症になってすぐに死んじゃうんです。二人ともそうだと思います。三木先生のことについては高倉先生はご自分がお書きになっておるそうですから……。

沼田　みんな歴史的事実ですからね。なにも高倉さんが悪かったというんじゃないし……。三木さんが気の毒だったということでしょう。

若月　まったくそうだと思いますね。

沼田　それも三木清の人間として立派なところでしょう。秘密にするの、しないのじゃないですね。そういわれる心情はわかりますけど、やっぱりああいう時代が殺したのですよ。

ところで、先生は金沢に行かれておりますね。

◎我もし民衆の友たらんとせば

若月　金沢にはちょうど一年間おりました。大学から派遣されたのです。石川県の小松に。そこで、さきほど話題になった工場災害調査の論文を書いたわけです。この工場というのが小松製作所なのですが、当時は工場の名前を出せなかった。日本のタンクは、当時全部あそこで作っていたといいます。あそこで作ったタンクでノモンハンは敗けちゃった(笑い)。

沼田　そうですか、そこにいらしたとはね。しかし、ああいうとこにおっても、論文を書く医者ばかりおるわけじゃない。そこがやっぱりじっと問題意識を持ち続けながらつねにやっておられる、それが素晴しいと思いますね。ぼくが野戦にいた時は、いつ死ぬかわからんという感じがつねにあった。先生の本を読んでみますと「人類のためになろう」とそういう気持ちをずっと持ち続けておられた。それが実に感心だと思うわけです。

若月　あのころぼくは「偸盗」って詩をつくりましてね。恥ずかしいけど当時のぼくの気持ちを……。「ミッドウェー海戦」の敗北のことは知らされていませんでした。しかし、スターリングラード攻略は失敗したらしい。そしてガダルカナルも撤退です。そういう切迫したなかですから…。大学に残って勉強しているレゾンデートルはなにか、ということを真剣に考えざるをえなかったわけです。そんな気持ちをその詩のなかにこう書きました。

「我もし民衆の友たらんとせば
今こそこの大学の宝庫より
真の宝石を選びて身に付くるべし。
真の技術と学問を盗み出して
民衆の中にもどるべし。
しかり、まさにこの宝物をもち去るべく
我は偸盗となるべし。
――空襲警報の暗黒の中にありて
わが眼(まなこ)ひとり不逞に
かがやく」

当時、こんな不逞な気持ちが確かにありました。

沼田　だからね、そこがなかなか逞しいわけで

すね。私とは現象的には似ているが心構えの基本がちがってます。それでは〝おまえ、何しとった〟といわれると何もしてない。侵略軍の権威をもって実態調査をすればいろいろ法社会学的な調査もできたでしょうに、それをやらなかったんだからね(笑い)。中国の農民たちとは仲良かったつもりだけどね。その気になれば協力してくれたでしょうが、中国語も覚えないのですから、学問的意欲の喪失でした。いっぺん逮捕歴があると軍隊のなかをついてまわるんで、大隊長がびっくりするわけです。旅団へ行ったら副官がびっくりする。憲兵隊から毎月「陸軍中尉、沼田稲次郎、右の者、動静異常なし」という報告が方面軍へいくわけですよ。その間に、多少のヒューマニズムを通してきたつもりですが、少なくともその時期ぼくは学問から離れておるのですよ。

若月　先生が盛んにおっしゃるのはそういうことですか。それは先生、私などは職業が医者ですから仕事がしやすいんですよ。

沼田　医学との関係があるんでしょうね。でもね、心掛けがりっぱですよ。小松製作所だって一人だけの医者じゃないでしょう。いろいろの企業にだって医者がいたわけです。そのなかでこれだけやられたというのは、一貫して学問的関心を捨てないで、しかもウ・ナロードの根性を貫いてみえたというのは、ちょっと驚くべきことだと思いますね。

若月　いえ、ほんとうは「馬鹿の一つ覚え」なんですよ。

③ 新版 日本労働運動の歴史　塩田庄兵衛著　B6上製 335頁 ¥1200

④-1 世界労働運動の歴史(上)　中林賢二郎著　B6上製 220頁 ¥1200

④-2 世界労働運動の歴史(下)　中林賢二郎著　B6上製 272頁 ¥1200

⑤ 新組合活動家ノート　内山光雄著　B6上製 272頁 ¥1200

⑥ 職場の労働運動 ―要求づくりと団体交渉　内山光雄著　B6上製 264頁 ¥1200

⑦ 労働委員会 ―制度と運用の実務　山本博著　B6上製 248頁 ¥1200

⑧ 経営分析と労働組合　角瀬保雄・谷坂芳郎・藪田礼二・中山金治・山口孝共著　B6上製 320頁 ¥1200

⑨ スト権奪還の理論　片岡昇・青木宗也・粕井常喜・中山和久・本多淳亮著　B6上製 256頁 ¥1300

⑭ 労働時間と労働組合 ―労働時間短縮・時間外労働・交替制・週休二日制のすべて　内海義夫著　B6上製 248頁 ¥1200

⑮ 働く婦人の権利読本　島田信義著　B6上製 256頁 ¥1200

⑯ 社会保障 ―その理論・歴史・動向　吉田秀夫著　B6上製 306頁 ¥1400

Ⅱ 民衆のなかへ

◎民衆とともに生きること

沼田　先生は『来し方の記』のなかで、「転向の屈辱と敗残のこころは耐え難いものがあった」と書いてられますね。そして職業的革命家の道を断念して医師として解放戦線の「後衛」にも意義あり、とされたわけです。もとより非転向を貫き通した職業的革命家は立派だと思います。共産党の中心部にいた人はそれが当然でしょうが、それでも佐野・鍋山の転向もあったわけで、にもかかわらず信念を守りぬいた人々、徳田球一、志賀義雄、宮本顕治、袴田里見など一握りの革命家は偉いと思います。戦後の足跡は多様ですけれども。

ただ、戦後の情勢の大きな変動ですね。スターリン批判があり、現存の社会主義国家のイメージの変化、生活水準、教育水準の向上、労働運動と市民運動の関係の様相などをみてきていましてね、戦前から戦時中を通じ、一〇年あまりも監獄にいて国民大衆から隔離されていては、やはりボルシェヴィーキ的誇りに依拠して孤節を堅持したわけでしょうから、ナロードの心を肌で感じていないことからの限界がさけられないのではないか、近頃ぼくはそんなことを考えたりするのですよ。非転向を貫いたのは立派だということに誰しも異存はない。だから戦後はヒーローでしたよ。日本にはレジスタンス運動がなかったから、非転向共産党員が唯一のレジスタンスをやったと思われるような集団でしたからね。だから野坂さんが帰ってきた時なんて歓迎ぶりはすごかったでしょう。野坂さんは中国の民衆を知っていたから「愛される共産党」と言えたのだと思いますよ。だが、長い間監獄に坐していたのでは民衆から離れておるわけです。いわば極限状態にいてがんばっていた。その点は立派であったが、民衆に入る前に官憲を相手にして運動しなければならなかったわけでしょう。同志と敵との関係で生きてきた。

ところが、民衆っていうのは卑怯なところもあれば保身もあるし、哀れなところもあれば図太いところもある。そういういろんな要因がある。それを肌で感じる機会はなかったのではないか。そして戦後は出獄と同時にヒーローであり、社会運動の指導者として登場しますね。ここでも労働者や市民大衆のなかに草の根の一人として入って活動する機会がなく、いつも輝かしい指導者であったわけですね。その点、レーニンはシベリヤに流刑中もロシヤ人民のなかにいたわけですよね、亡命中は外国の労働者のなかにあって運動してた、つまりウ・ナロードに終始できた。だから人民そのものの変化も鋭敏にとらえることができたように思います。

若月先生が屈辱を感じていられた頃も、考えてみれば、「後衛」つまり人民のなかにあって医学を通じて人民を肌で知り肌で感じてきていられたわけですね。しかも学問と働く者の医学への志向をもちつづけていられたわけですね。野戦に行ってられた時期もあるけど、私は、たしかに軍隊は「地方人」即ち一般社会から隔絶された社会ではあったが、兵隊さんというのは農・漁民・労働者といった人々で、学生あがりのインテリでもそれなりに人民を肌で感じうるところだと思うのです。さらに日本軍が警備と称して占領していた満州とか北支とかでは、中国人民とくに農民にふれることが多いのですね。今から考えると、それとして意識しないで人民の心をもつ人民に自分もなっていたのかもしれないと思うのですよ。先生は、僕のように風に漂う浮草みたいじゃなく、目的意識的に暮らされたから、もっと深いでしょうね。そして戦後も、先生は佐久の農村に定着し、医療だけでなく文化・芸術運動にも入っていってられる。先生は佐久病院の従業員組合の組合長になられていますね。私も戦後、京都で『夕刊京都』という能勢克男、住谷悦治などの進歩的文化人が創立された新聞社に就職しまして間もなく、組合が結成されて、私が組合長に選ばれましてね。

ともかくも、ぼくらの世代で戦争中も先生のような意識と意欲で勉強し、民衆のなかに没入していて戦後を迎えた人というのは珍しいと思いますよ。そういう角度からも、先生と話してみたいという気持ちにうながされていたのですよ。

若月　なるほど。

沼田　不転向で頑張って、というのは立派なもんだけど、その避けがたいブランクを自分はどう考えているかですね。しかも、不転向で頑張ってきた人はみんな戦後ヒーローになってしまって、これまた民衆からほとんど離れてしまった。法則とか原則とかはわかるのだろうが、それを実現してゆく人間を、見失うおそれがあるような気がします。民衆の心とか、その潜在的な力とかいうのは民衆のなかにいなくてはわからんのではないかということですが、どうでしょうかね。

㊙民衆とは　と問われて

若月　いや、まったく同感です。先生のおっしゃる通りですね。どうも先生にすっかり分析されちゃいました(笑い)、ぞーっとしてるんです。確かにそうかも知れません。すっかり解剖されちゃった感じ……。

沼田　心は民衆の中にいなくてはわからない、先生が民衆から何を汲み取られたかということですね。戦争中からやっておられたからね。

若月　あまりに重大なテーマなので……何とお答えしていいか……。しかし、先生のおっしゃることは、すっかり私の胸のなかへ滲みこみます。すべては民衆のなかにある……。

沼田　民衆の本当の問題を肌で全人間的に考えてるといいますかね、そこから問題をおこされて自分の民衆への働きかけなり、自分の証明というか、使命を考えるということをやっておられるような気がするんです。

若月　確かにそうです。先生のお言葉に無駄はありません。つけ加えるものは何もないんですが、もしひとこと言わせて頂くならば、民衆というものの重要性というか、恐ろしさですね。

私どもはインテリなものですから、つい理論から入るんです。理論からつかんだ民衆というものは具体的じゃないんです。すこぶる具体的でない民衆という言葉は、勝手に一人歩きしやすい。しかし、私は民衆の力が、結局すべての基本という気がしてるんです。社会の発展や歴史のですね。どうもわれわれインテリは、理論やイデオロギーが先になるもので、人間的な民衆がつかめない。いったい私どもは何を志向して毎日たたかっているのかですね。それはイデオロギーのためなのか、理論のためなのか、もちろん、それらを頭から否定するわけではありませんが、しかし、少なくとも、民衆は理論のためには動かないですからね……。

何のためのイデオロギーなのか、何のための理念なのか、ということになりますと、ずうっと突き詰めていけば、結局、お互いが人間の幸福な社会をつくるため、ということになるんじゃないかと思うんです。その「人間」というのが具体的には「民衆」というものにつながるのであって、そこなんですね。民衆というのはもちろん限られた一部の人ではない。抽象化された人間でもない。そのへんにいっぱいいるあの父ちゃんや母ちゃんの、あの庶民ですね。それを抽象して「人間」という概念が出てくるんでしょうし、それから「人間のため」という高尚な考えも出てくるんでしょうし、社会の改革というテーマも出てくる。しかし、一番の元は、なんといっても、生きてる民衆、食べたり飲んだり、楽しんだり、苦しんだりしている庶民なんでしょうから。これを具体的につかまねばならない。それにはどうしても庶民と一緒に暮らさねばならないのです。そして、庶民に対する共感をもたねばならない……。

しかしこのような民衆のつかみ方はどんなものでしょう。しばしば私どもはたんに階級闘争論的に把握する。資本主義社会においてはブルジョアとプロレタリアという基本的対立でつかまえる。これは確かにゆるぎない事実だし、間違いもないと思うんですが、しかし、ブルジョアとプロレタリアの対立だけで、そういう階級闘争論的な関係だけで、人間がつかめるかというと、必ずしもそうじゃない。決してそうじゃないように思えるんです。

私には学生の時代から、どうもそれだけでは庶民とか大衆とはつかめないという不安があったのです。『資本論』はいま読んでもあのなかの命題が一つひとつ胸に落ちます。間違ってないことはよくわかります。じゃあ、それだけがすべてかというと、総論賛成、各論反対というわけじゃありませんけど、生きていく人間の社会のなかにはいろいろの契機がある。運命的なものもあるし(笑)……。

たんなる決定論で説明できない偶然的なファクターもたくさんあるし、もちろん、個人的なものも大いに入ってくる。歴史のなかにも個人の役割はある。それが非常に大きなウエートをしめることもある。個人的な関係が例の党派性に移行したり、……それがしばしば歴史に大きな変動を与えることだって稀ではありません。

こういう考え方は決して『資本論』の悪口じゃなく、その上にさらに現実の世界の複雑さを見ることの必要性なのです。人間の欲望とか幸福感とか……。その現実をしっかり見ることだと思うのです。いったい私などは「実践」をしなければならない人間なのです。だとすれば、「民衆とともに」歩かねばならないのです。「批判的に」ではなく、「一緒に」やっていかなければならない。実践ではやり直しは効かないのです。口先きの理屈だけではかたがつかないものがたくさんあるということなんです。

考えてみれば、階級闘争論でも農民というものは、エンゲルスがいうように「プチブルジョア」なんですからね。ブルジョアに対立するプロレタリアではない。プロレタリアの同盟軍だというのですが、プチブルは元来がブルジョアの方に傾きやすい面があるんじゃないでしょうか。また、わが国にこんなにインテリゲンチャがたくさん出てきた。その多くは労働階級に属すべきだと思うのですが、自分では「中産階級」だと思っているインテリが近頃はたくさんいるというのですから……。わが国などのこういう農民やインテリがたくさんいるという実態をよくわきまえず、たんに階級闘争論だけを理論的に押しつけても、うまくいかないのではないでしょうかね。でないと、あの六〇年安保がなぜ今日の八〇年代になって、少なくとも表面的には、下火になっている現実を説明できません……。

●民衆の人間像について

沼田　先ほどからばかに遠慮なさって、インテリゲンチャだからとおっしゃっていますが(笑)、マルクスにしろエンゲルスにしろインテリゲンチャでしょう。

若月　そうなんですね。

沼田　エンゲルスにいたってはマルクスに貢いでやったくらいな実業家ですよ。当時のヨーロッパの最高の知識人たちですね。レーニンはインテリゲンチャというのは、農民や労働者やらと区別した階層に持っていこうとしたけどね。戦前の日本はその傾向があったが、あれはロシア革命の影響があるんじゃないですかね。

そのくせロシア革命、こんなところで急にそんな話も何だけれども、一九世紀のロシア文学、お互いに読みましたね。

若月　はい、大いに読みました。レールモントフやツルゲーネフなど大好きで……。

沼田　特に私は北陸で、四高の文芸部というのは北欧文学とかロシア文学がはやったんです。だから、プーシキン以来のロシア文学を読んでるわけです。要するに、ロシアのインテリゲンチャと、八割以上が文盲であった農民との関係でとらえて、それを今の日本に当てはめるというのはちょっとどうかなという気がするんです。

若月　たしかにそうです。

沼田　先ほど先生がおっしゃった「近ごろは……」というお話ですが……、先生は医学を通じて、患者を通じて、ないしは住民を通じて人民をみてこられた。戦前に、若い医学生として小松製作所やいろいろな開業医などのところへ行かれたりされているわけですね。夜中に電話がかかってくるとかね。ああいう時の民衆の人間像というものが戦争直後と今日と比べて、かなり変わっているんではないですか。

私自身、戦時中は日本の人民の生活と苦悩とはじかに知っているわけではありません。ただ、いくらか中国の農民や兵隊を知っています。だが先生はもっとじかに日本の住民のなかに入っておられるわけですよね。そこで感じられた人間像ですね。先生が見られた戦前の住民とどう変わってきたのか。そういう実感みたいなものがあって、それで自分は何をこの人のためにやることが民衆に返すことなのか。そういうことについてその折々にどう感じてこられたか。そこをお話頂くと現在につながっていくような気がするんですけどね。

若月　率直に申し上げて、さきほどもいいましたように、そのへんの父ちゃんや母ちゃんたちに対等で付き合い、彼らとの交渉の経験を重ねるなかから「人間」を理解することが私の基本的なやり方だと思っているんです。そのなかから共感や愛も出てくると。今日ではナロードというようなロシア語はあまり使いませんが、当時の私などには深い愛着があるんですね。いや、それだけだと

さえ思いつめているわけです。「ウ・ナロード」、人民のなかに入りこむことの重要性です。とくにぼくたちインテリはです。ですから、彼らとの付き合いは今でも懸命に続けています。そのなかからなにかをつかもうとしている。一種の「人間探求」かもしれませんがね。

たしかに個々の人間には違いがあります。大きな違いもありますし小さな違いもあります。だが、共通な何かがあるんです。

沼田　そのほうが多いでしょうね。民衆ってそうバタバタ変わらんですから。

若月　それをどうつかむかですね。先生が先ほど言われたように、民衆ってものは、ずるくて、しかも図太いっておっしゃった。そのとおりだと思います。ずるくなければ生きていけないからです。その生きていくための図太さはすごい。僕はそれを美しいとさえ思っています。そこに民衆のすばらしい力がある。

沼田　それがあるから極端なはね上がりへの歯止めになっているということはありますね。

若月　民衆の力は「歴史の歯止め」の役割をする。そこが大切ですね。戦争中に兵隊さんはバンザイ、バンザイと言われて戦地へ行きましたが、戦死する時に「天皇陛下バンザイ」と言ったというのは、実際はウソです。私が戦地で経験したかぎりでは、そんなこと誰一人言いやしなかった。死ぬ時言ったのは、「母ちゃん」の一言でした。なかには「××ちゃん」と固有名詞の女性の名を言った者もいましたがね(笑)。

戦後になってぼくが一番ショックだったことは、多分誰も同じだと思いますが、戦争が負けたのに、こんないい時代がきたことです。こんなに日本が繁栄するなんて夢にも思えなかった。ぼくなんかは戦後は厳しい時代がくると覚悟していました。まさか朝鮮半島みたいに、内乱が起こることはないと思ったけど、でも、どうなるかわからない。そして、高度経済成長になるなんて、ぼくなんかの頭では想像もできなかった。苦しい困難な時代をこの山の中でこれからこの土地の人たちと一緒にがんばってやっていくつもりでいたんですけれど……、思いもかけずこんなふうによくなった。今の農家の生活などは、表面から見ますと、この山の中でも、マイカーを持たない農家はないくらいです。カラーテレビはもちろん電気洗濯機、電気冷蔵庫、それにいろいろな農業機械。そして年に一回は、おじいちゃん、おばあちゃんが外国までツアーに行くという騒ぎです。

沼田　スーパーもありましたね。食生活も平均化したし、まったく同感です。

若月　昔は農民はやせていて摂取カロリーの足りないことが農村医学の基本的テーマだったんですけれど、今日では太らないようにすること、つまり肥満が問題になってきたんです。大変な変化です。

沼田　飽食の時代っていうやつですね。

若月　つまり農村も飢餓の時代から飽食の時代に移ってしまったのです。戦後の四〇年の間に物質的に大きな転換が行われましたが、同時に民衆の精神のなかにもいろいろな変化が出てきた。それにいいものもあるし、悪いものもある……。

◎民衆の中のデモクラシー精神

若月　そういう表面上の違いがあるにもかかわらず戦争前と戦争後とで一貫して変わらないものもあるのです。先生の言葉に従えば、民衆には図太さがあるわけです。そして、それはかつてもあったのです。戦争で死んで行った兵隊さんはたくさんいましたけど、民衆は心のなかでは戦争を呪っていたはずです。いや、軍隊へ行った兵隊さんでさえ、私が見た限りではそうでした。進んで人殺しをした兵隊もまれにはいましたけれど、やっぱり一般の兵隊は決してそうではなかった。いったい民衆というものは、あまり乱暴するのが好きじゃない性質をもっているんです。ヒットラー・ユーゲントや文革の紅衛兵のような、煽られた若者なんかは別ですがね。

戦争が終わり一時はひどいインフレと貧乏のなかにつき落とされていましたけれども、昭和三五年を過ぎる頃から、次第に生活が良くなっちゃって……。現在ではこの山の中の農家でもみんないい生活をしています。考えてみれば、民衆というのはずるく、そして図太い。「戦争反対」なんてことは口に出して言わないけれども、われわれが「戦争反対」と言い出せば即座に賛同する。しかし、自ら言い出すことはなかなかしない。そのへんはわが国の支配階級の教育と支配の仕方のうまさが関係するんでしょうが……。情報化社会になっていろいろな情報がたくさん入ってきます。そのなかには間違った悪い情報も当然入ってきます。しかし、とにかく議会民主主義というものが

（そのために田中角栄が二二万票も取るという現実もありますけれども）、一応、終戦前に比べれば大きく定着してきたと言えましょう。議会民主主義への要望が民衆の心のなかに、支配的になりつつあるという事実を認めないわけにはいかないと思うんです。

もちろん、簡単にそれを賛美しているわけではないし、イージーにそれに安心なんかしているわけではありません。非常に危いものはたくさんあります。にもかかわらず、民衆の心の大きな流れのなかには、デモクラシーみたいなもの、ヒューマニティへの強い要望が大きく出てきているという事実は否定はできないと思うんです。「安保反対」の学生運動には乗らなかった民衆は、しかし、戦争反対、核廃絶を心から願っているのです。

それが民衆の図太さのなかに入っているんです。ずるくて相当インチキなんですけど、従って紆余曲折は大いにあるんですけれど、それにもかかわらず、意識的にも無意識的にもそういうふうにデモクラシーの方向が滔々と流れているという事実を、この山の中にいてさえ感じないわけにはいきません。それが私なんかを今日、こういうオプチミズムのなかに置いている原因になっているんじゃないかと思ってるんです……。とにかく、ファシズムの台頭は絶対に困りますね。

沼田　私もそう思いますね。私が図太いと言いましたのは、戦中戦後いろいろの局面で感じたものなのですが、野戦で日本占領軍の下での中国の「老百姓」つまり農民の図太さに迫力を感じましたよ。中国の民衆というのは民族興亡の歴史を経てるからか図太いものをもってますよね。その心情のなかには、ナショナリズムもあるだろうし、人間の尊厳へつながる「ばかにするな」という感情もあるんだろうと思うんですよ。鈍重だが大河のような力でしょうかね。

御承知のように、戦争中、北支では八路軍（中国共産党軍）は太行山脈に前線の本拠をおき、劉伯承の一二九師団が迎撃戦を展開し、ずうっと浸透していたわけです。民衆をつかんでいましたね。いや民衆とともに戦っていたといえましょう。抗日という共通の基盤に立ってました。日本軍は太行山脈をどうしても攻められないのですよ。

そこで北支方面軍は、京漢線とか津浦線の鉄道沿線に幅三メートル、深さ二メートル以上の壕を延々と掘るわけです。封鎖壕つまり平郷からの輸送を遮断して太行山脈を兵糧攻めにしようというわけですね。それをうちの大隊にも割り当てて、大隊の警備管内をやれというわけです。ぼくはそのとき大隊の情報主任で旅団司令部での会合に出席していたから、そういうことをしたら「大東亜共栄圏」ができない。壕を掘るのは農民自身にやらせるわけですからね。土地の生産力を奪い、農民の労働力を奪っておいて、治安がよくなるものかと言ったんです。そうしたら、「方面軍指令官の命令じゃ」と言うわけです。大隊長も物わかりのいい人で、ぼくの意見に賛成だったのですが「こうなっては、仕方ないからやろうや」ということでやることになるんです。

ところがあとで戦局が悪くなってきて、掘った壕が八路軍の鉄道爆破のための隠れ家になるんです。それは後日談ですが、実は壕を掘ったけれども、それで封鎖ができたわけじゃない、夜があけると、壕が埋まるわけですよ。車の跡がついてるわけよ。八路軍の車はちゃんと通っていってるんですよ。日本軍は村長を呼びつけて「なんじゃ、これは」と言っても「これは八路軍が埋めたのだろう、われわれは知らん」と言う。事実は、みんな農民がやってるわけですよ。それで翌日は日本軍のもとでみんな黙って穴を掘っとるわけね。

若月　なるほど（笑い）。

沼田　さすがだと思いましたね。結局、ぼくの言った通りでしたよ。あんなばかなことやったって治安に何のプラスにもならなかったんですね。

これはアメリカがベトナムでも失敗したんですが、日本の軍もやってたんです。部落の周りに城壁みたいのを作って、八路が来たら部落が自衛しろというわけです。ところが戦局が悪くなると日本の警備が点と線だけになるでしょう。そうなると村の城壁の鋭眼は八路の方を向かないで日本軍に向くことになるわけですよ。生命と生活のために辛棒して日本軍に黙々と従って働きながら、長期的にはちゃんとレジスタンスを展望してたんでしょうね。そうやりながらしかも生活してる。

日本の兵隊さんも軍隊のなかにおりながら「軍隊は要領なり」というのをご存知でしょう。あれは兵隊さんの図々しさですよ。内務検査のあるときだけきちっとやるんだけど、内務検査が終わっちゃったらいい加減なもんですよね。規則通りにやっていたら、体がいくつあっても足らんのですよ。それをうまくやるやつがうまくやる。そうい

う一面がそのときでもあったのではないか。

戦後は戦後なりに、朝鮮戦争が起こったりしても必ずしも日本に爆撃機がくるとも思っていなかっただろう。武装解除されてこっちは裸だから裸の強さみたいなもので、極貧のなかでもヤミ市とかアングラ経済はしかるべくやっていて、食いつないでいった。安心していいものやらどうやらわからない。何しろGHQという権力がにらんでたから。でも民衆はGHQに従うごとく、従わざるごとく建前と本音を使いわけたりしながらしのいでいたんじゃないですかね。

若月　ほんとうにたいしたもんですよ。

◎土地の人とは離れられない

若月　率直に言いまして、私などここへ来ましてから、若さにまかせて終戦後の解放感からいろんなことやって「アカだ」と土地の人から非難されたものです。特に、私たち外来者のことを「キタリッポ」と呼んで非常に差別するんです。「キタリッポ」というのは要するに「よそ者」なんですね。それに加えて、私は「アカ」でした(笑)。ことにこの臼田町はかつて御天領でした。佐久地方にある岩田村藩と田口藩の両方ともわずか一万石ぐらいの小さな藩ですが、この両方をここで徳川幕府が睨んでいたわけです。御天領ともなれば、同じ百姓でも一段格が上だというくらいで、それだけここは封建的でした。そういう所へこの病院ができ、そこへ私がきたわけです。

昭和二〇年三月、私がここへきたときにはすでに「アカ」だということが警視庁から通報されていたらしく、この町の警察署長からマークされていました。終戦になりましてからは、高倉テル先生の御指導もあったし、日本平和委員会の平野義太郎先生なども時々きて下さいまして……。私もおっちょこちょいだから、いい気になって、いろんなことやりました。

昭和二一年の二月七日にこの東信地方で真っ先に労働組合をつくった。このへんの山の中には小さな地主がたくさんいまして、そういう人たちが第一次農地改革に大変な恐怖感を感じ、非常にアカをいやがる。反感をもつわけです。そういう人たちにずいぶんやられました。やられましたけど、あれから四〇年、とどのつまり、ぼくはここで一生やっていこうという気になってしまう……。

沼田　簡単に言えば、患者が信用してきたのでしょう。テレくさがらんでもいいですよ(笑)。

若月　そういうことでしょうか。

沼田　患者はアカでもシロでもいいんですよね。生命をあづけられる先生ならばね。

若月　実は、その後昭和四五年の全国農協大会で農村医科大学をつくろう、ということになったのです。農村に医者がこないから、農村にくるような医者をつくるには、自分たち農協の力でやらなくてはいけないということだったんです。もちろん、この病院を目当てにしてのプランです。この運動があるところまで燃えてきたときに、当時の総理大臣が〝あれはアカだからあそこにはつくらせちゃいけない〟ということで、この計画はつぶされてしまったというんですがね。

そうしたら、それを当時の美濃部都知事が聞いて、東京都に都立医科大学をつくる計画があるから……。

沼田　ぼくが都立大学の総長をやってたときに医学部はどうだと、打診されたこともありましたね。

若月　そうでしたか。先生のところへ行ったんですか。

沼田　ところが、学生紛争がまだ治まっておらん時期でして、今は主体的条件が整わんから待ってくれと言って、一年ほど経って学内は治まりましたので、美濃部さんに「私のほうはだいたい整ったから医学部のこと考えてみましょうか」と言ったんです。ところが、今度は美濃部さんの方が乗れなくなった。なにぶんにも、オイルショック以後の地方財政のひっ迫でそれどころじゃなくなりましたから。

若月　じゃ、私のところに話があったのはその前かしら。白木博次という教授をご存知でしょうか。当時東大の医学部長をしていた……。脳神経病理学の権威です。

沼田　存じません。

若月　その白木教授が私のところへきた。

沼田　いつごろですか。

若月　美濃部東京都知事が大いに活躍されていた頃です。

沼田　あれは保健大学じゃないですか。

若月　ええ、その保健大学なんです。三多摩に作るという。

沼田　三多摩の保健大学ですか、あれは美濃部知事も長いこと考えとったんですね。私のところ

への話というのは医学部なんですよ。病院。

若月　先生のほうのが話が先でしょう。

沼田　ええ。もっともほんの打診の程度でしたが。それが例のオイルショックで地方財政が困難になってそれどころじゃなくなってきたわけで、それでその話は消えたんだけど、保健大学はだいぶあとまで美濃部先生、あきらめきれなかったようですね。

若月　そうですか。私のところに白木教授がきましてね。当時、白木さんは美濃部さんの医療関係のブレーンだったようです。それで、美濃部さんが保健大学を五〇〇億円かけて三多摩につくるといっている。三多摩には農村地帯もあることだし、私に出てこないかと勧めるんです。

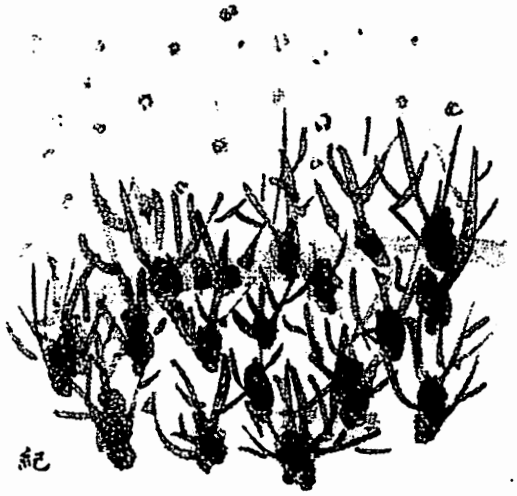
ありがたいお勧めではありますが、私は即座にお断りしました。私はこの土地でいじめられてきましたけれども、今ではここがすっかり好きになっちゃっている。ここを去って東京へ行く気はしないんです。「農村医科大学」が東京にできるのも変な話ですし…。「ありがたいけれどもお断りします。私はこの信州の山の中で死ぬつもりですから」といいました。

そりゃ先生がおっしゃるとおり、農民というのはずるい。ずるくて、けくちさくて。でも、それがまた魅力になっちゃうのですから不思議なものですね。もともと素直で純粋だからでしょうね。

沼田　そういうところがわかって包容してゆかれた。

若月　農村の人たちと一緒に暮していると、だんだんいいところがわかってくる。むしろ、インテリぶっていた自分の思い上がりの方が反省されてくるのです。とても彼らと分かれる気なんかにならない。そして「死ぬまで」ということになっちゃうのです。今ではこの信州の土地の悪口をいわれると、癪にさわるようになってしまいました。

□　□

□

□　□